



TITLE:

女國と蘇毗

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 女國と蘇毗. 東洋史研究 1942, 6(6): 409-442

ISSUE DATE:

1942-02-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145760>

RIGHT:

東洋史研究

第六卷
第六號

昭和十七年二月發行

女 國 と 蘇 毗

佐 藤 長

洋の東西を問はず女王國又は女人國の存在は甚だ多い。支那の場合も此の例に洩れなく、色々な記録が残つて居る。しかし大體に於てそれらは傳説的存在で、若しも實際にあてはめようとすると、かなりの無理を生じて來る。Schlegelの場合等はその好例である。^①所が此處に問題とする隋書乃至は兩唐書に現れる東女國は、隋唐の朝廷又は印度と政治的經濟的な交渉があり極めて現實的な存在である。既に Klaproth は一八二五年に唐書^{卷二二上}東女國傳を佛譯し、印度學者 Wilson、社會學者 Bachofen の引用する所となつた。^②後又 Rockhill は新舊兩唐書の東女國傳を英譯し、支那では丁謙が之が考證をなし、次いで佛國の Pelliot 教授も之に觸れて居る。我が國では藤田博士がかの有名な「慧超往五天竺國傳箋證」に於て之を注意し、中田博士、佐喜眞氏、秋葉教授の研究出で、最近は松田學士の優れた論考が發表された。^③ロツクヒル、丁謙は東女國を以て北方西藏の全域にあて、藤田博士は西藏高原全體をそれと見做したが、ペリオ教授は新唐書の東女國は現在の西康省に存在したものであ

り、玄奘等の女國の記載が混淆して居ると考へた。^④秋葉教授もやはり四川徼外の地に別な女國を認められて居り女國と區別して居られる點同様であるが之等は共に史料の徹底的批判から出發したものではない。松田學士の研究は種々の詳細な論述を含み、特にその歴史的性情を明かにせられた點は大きな特徴と云はなければならぬ。しかし氏の所説はやはり大體に於て、ロツクヒル、丁謙、藤田博士の説を繼ぎ、吐蕃の西北方 *Byan-chan* を女國とし、同時に新舊唐書の説をも容れて西康方面にもその範圍を擴げられて居る。結局氏の考へに従へば西藏高原全體が女國となるであらう。氏の史料批判には若干の問題があり、對立して到底相容れない史料を折衷して、反て女國の概念を模糊たるものにして居る。ペリオ教授の考へは或る論文の補註の一部に簡單に述べられて居るだけであるので詳細は知り得ない。が、私見を以てすれば氏の考へは正しく、ロツクヒル以來松田學士に至る諸氏の考へは總て従ひ得ないやうに思はれる。左に粗雑ながらも、ありふれた史料を以て若干異見を書き記し、諸賢の批判を乞ふ次第である。

西藏民族に對する支那人の認識は、時間的に遡つて見るとかなり古い所に始まつて居る。兩漢より南北朝にかけては支那史上に氐・羌族が西藏系民族として名を著はして居る。漢代に匈奴と連絡した羌、南北朝に西北邊境に迭立した氐・羌の諸國家がそれであり、此等に關しては割合に詳細な記録が残されて居る。しかし支那史書に於ては結局支那中原との政治的關係にその史的意義を見出すのであるから地理上からは勢ひ支那の周邊のみの記載に限られ、深く西藏高原の内部にまでは立至つて居ない。例へば後漢書^{卷一七}西羌傳には、

發羌唐旄等絕遠、未嘗往來。

とあり、南北朝時代の史書には吐谷渾・黨項の記載は詳細であるが、その西方奥地に至つては全く觸れる所がな

い。尤も北史外國傳、隋書西南夷傳には各々附國傳なるものがあつて其の國名が *bon* に近似し、居住地が蜀郡の西北二千里で大體中央西藏に近い。故に之を吐蕃の前身とは認めて居るが、唐代の吐蕃が直に之に一致するかどうかは尙幾多の疑問を解決して後の事である。南北朝時代の諸史が共に之を嘉良夷に結びつけて西南夷に考へて居る所を見ると、當時の支那人は西藏高原を一つの地理的區劃として未だ充分には理解して居なかつたやうに思はれる。此の大高原に存在する民族は南北朝末期には、北より吐谷渾・黨項・西南夷と順次に並列せしめ得るが、その各民族の西境が何處まで擴がつて居るかについては甚だ漠然たるものがある。即ち隋書卷八十三 西域傳に就いて之を見ると、吐谷渾は煬帝に討たれて國王伏允が山谷間に逃れた事を云ひ、

其故地皆空、自西平臨羌城以西、且末以東、祁連以南、雪山以北、東西四千里、南北二千里。

とあつて割合に明確であるが、之は吐谷渾の位置が當時東西交通の要衝に當つて居たが爲で、至極當然の事と云はなければならない。所が黨項の境域に就いては、

東接臨洮西平、西拒葉護。

とあり、舊唐書卷一 九八 黨項傳には、

其界東至松州、西接葉護、南雜春桑迷桑等羌、北連吐谷渾、處山谷間、亘三千里。

とあつて、吐谷渾の南方よりかけて西方は *Byan-ghan* を越して西突厥に接し、その廣大さは讀むものをして驚嘆せしめるのである。しかし之は我々の知識を以てする地圖上からの判斷であり、兩書共に西を葉護に接せしめたのは當時西突厥が西藏高原の北方乃至西方にかけて大勢力として存在し、同時に *Byan-ghan* 方面の内情が一向東方に知られず殆ど空に等しき存在になつて居たが爲に他ならない。舊唐書の記載は全く隋書のそれに則つた

もので、新唐書地理志、兩唐書吐蕃傳等によると、少くとも唐代の入吐蕃道には吐谷渾、白蘭、多彌、蘇毗、吐蕃の順が現れて來、多くの異種族が高原内部に存在した事を示して居る。^⑤これは恐らく吐蕃の勢力の伸張しない隋代に於ても大差はなかつたであらう。しからは黨項と葉護を直接に接合せしめるのは甚だ無理な事と云はなければならぬ。新唐書の黨項傳も此の誤つて居る點は同様である。黨項の存在は如何にしても入吐蕃道の東側と定めざるを得ない。要するに支那の歴史編纂者はかゝる遠隔の地の記載に際しては二つの民族乃至國家の中間のブラシクは糊塗し、兩者を直に結びつけるが爲に、其の境域は後の讀者に意外に廣大な感を與へはするが、實際は兩者間に存在する未知の地帯を何れかの側に便宜的に含まして居るか、或はそれらを記録の不備から一切無視して居るかであり、それを現在の地圖上から我々が線的境界觀を以て判斷して居るに過ぎない。地理的空間と云ふものは歴史的時間と同様、記録のない事によつては否定することは出来ないものである。此の事は女國の範圍を決定するに先づ明確に把握されねばならぬ重要な基本觀念である。

二

以上のやうな考へを以て先づ女國の境域の考察に歩を進めるのであるが、女國の記事が最初に出て來るのは松田學士も指摘せられた通り魏書宋書の吐谷渾傳であらう。^⑥しかし整理せられた報告としては先づ隋書の記事が最初である。隋書^{卷八}女國傳には、

女國在蔥嶺之南、其國代以女爲王、王姓蘇毗、字末羯、在位二十年、女王之夫號曰金聚、不知政事、國內丈夫唯以征伐爲務。

とあり、同書^{卷八}附國傳には、

〔附國〕西有女國、其東北連山綿亘數千里、接於黨項。

とあり、女國を Pamir の南、附國の西に置して居る。所が同じ女國傳の文中には又、

亦數與天竺黨項戰爭。

なる注意すべき文句を掲げて居る。パミールの南に存在するのであるから天竺に接するのは當然であらう。

Rajatrangini によれば第八世紀の初頭 Kashmir の Lalitaditya 王は國北の Bhir-rāja を征服したが王死すると直に叛き去つたと云ふ^⑦。後に述べる如く Bhir-rāja は文字通りに女王國であるから、天竺と戦争したとの記録は事實と見做してよい。但、前述の如く黨項を入吐蕃道の東側に置くとすると、「數與黨項戰爭」と云ふのは極めて難解な文句になつて来る。

所が舊唐書^{卷一}東女國傳には

東女國西羌之別種、以西海中復有女國、故稱東女焉、俗以女爲王、東與茂州黨項接、東南與雅州接界、隔羅女蠻及白狼夷、其境東西九日行、南北二十日行、有大小八十餘城、其王所居、名康延川、中有弱水南流、用牛皮爲船以渡、戶四萬餘衆、勝兵萬餘人、散在山谷間。

とあり、東方東南方の國境は附國即ち唐代の吐蕃の西境を突破し、その東邊に殆ど一致する所まで延びて居るのである。東方を茂州、雅州に接せしめて東西九日行、南北二十日行を考へると結局 nDo から Klamms へかけた地方にその西境を置かねばならなくなり、之亦入吐蕃道の東側に存在を認めざるを得なくなつてしまふのである。此の史料の場合に吐蕃が全く無視せられて居る事は注意すべきであらう。之と對應する新唐書^{卷二二}東女國

の傳は、

東女亦曰蘇伐刺拏瞿咄羅、羌別種也、西海亦有女自王、故稱東別之、東與吐蕃黨項茂州接、西屬三波訶、北距于闐、東南屬雅州羅女蠻白狼夷、東西行盡九日、南北行盡二十日、有八十城、以女爲君、居康延川。

と述べ、新に東女國の別名を蘇伐刺拏瞿咄羅とし、東境が吐蕃、西境が三波訶、北方が于闐に接して居る旨を特記して居る。

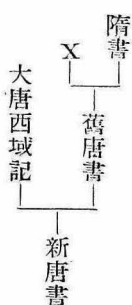
同じ東女國に關する記載でありながら、その四境について各書が各様の説明をなし相互と一致しないのは何故であらうか。新唐書にあらはれた新史料については松田學士は炯眼にも玄奘の大唐西域記からとつたものなる事を看破せられた。^⑧西域記卷四盤羅吸摩補羅國 *Brahmapura* の條には、

此國境北大雪山中、有蘇伐刺拏瞿咄羅國唐言、金氏、出上黃金、故以名焉、東西長、南北狹、卽東女國也、世以女爲王

……土宜宿麥、多畜羊馬、氣候寒烈、人性燥暴、東接土蕃國、北接于闐國、西接三波訶國。

とあり、一見して松田學士の説の正しい事が肯かれる。

所で以上に擧げた各史料を並列し熟讀すると此等は皆實は多かれ少かれ必ず前代の史料を襲用して作られたものなる事が判明する。即ち各史料相互間の關係は次の如き系統圖を以て表す事が出来るのである。



此の表に於てオリジナルな史料は隋書、X、西域記の三つなる事が明かにせられる。便宜上先づ最も直接的と思はれる西域記の記載から批判檢討をはじめて見よう。

西域記の蘇伐剌拏瞿咀羅が玄奘によつて唐言金氏と註されて居る事からして *Suvarṇa-gotra* なる事は今や全く疑ふ餘地はない。慧超往五天竺國傳にも、^⑨

又一月程過雪山、東有一小國、名蘇跋那具怛羅、屬土蕃國所管、衣著與北天相似、言音卽別、土地極寒也。とあつて明かに *Suvarṇa-gotra* が出て来るから、之を *Walters* の如く傳説國と斷定し去る事は出来ない。^⑩ 此の西域記と慧超傳の記載の相違については松田學士が充分考證せられて居る。^⑪ 就中、前者に於て「東接土蕃國」とあり、後者に於て「屬土蕃國所管」とあるのは女國が吐蕃の勃興と密接な關係ある事を示し、此の一事を以てしても *Suvarṇa-gotra* が現實の國なる事は充分證明せられる。玄奘は *Brahmapura* 國に於て此の國の存在を知り、慧超は北印度に於て其の傳聞せる所を記した。當時印度に於て此の女國は如何に知られて居たであらうか。問題は更に前提的に印度文獻への検討へと向ふべきであらう。

三

印度に於ける女國 *Suri-rāja* の知識については既に *Mahābhārata* に其の記載あり、かなり古くから印度人の觀念に入つて居た事が分る。^⑫ *Kalhana* の *Rajatarāṅgiṇī* を見ると *Suri-rāja* は *Bauṭa*, *Davada*, *Uttarakuru* と共に相互に隣接せる國として屢々現れて来る。^⑬ *Bauṭa* は *Bhoṭa* に同じく西藏を指し *Davada* は *Dardistan* を指して居る。 *Uttarakuru* は例の印度の宇宙論 *Kosmographie* に於て *Sumeru* の北方に存在する大洲で漢譯の鬱單越であるが *Levi* 博士の考へによると、弗婆提 *Purvavideha*、瞿陀尼 *Aparagodana* と同様 *Uttara+Kuru* で、*Kuru* は今の *Delhi* 附近であるから、之によつて以て北方の洲名になつたものであらうと云ふ。^⑭ 若し *Rajatarāṅgiṇī* に出て来る *Uttarakuru* も結局 *Kuru* の文學的表現に過ぎないとすれば *Delhi* 附近に置かるべく、カ

シミールの南方を含むと考へられる。東方は西蔵、西方は Dardistan, Kuru 地方、此の兩者に挟まれた方面を *Str-rāja* とするのは何等不都合がないであらう。Rajatarangini ではカシミールの大王 Lalita-ditya が北方の *Str-rāja* を攻めた時、女王、女軍總出でエロティク戦術を用ひ、爲にカシミール軍は盡く惱殺されて大敗北を喫したと云つて居る。¹⁵ 話は傳説的であるがこの場合の北方は明かに東北方である。

更に大方等經月藏分 *Candragarbha-sūtra* を見よう。開元釋教錄^{卷十}によれば本經は北齊の天統四年に *Uddiyana* 國人の那連提耶舍によつて漢譯せられたが、その第十二分閻浮提品第十七には世尊が諸神に命じて此の閻浮提一切國土を守護せしめて居る。其の國土の名は散文と偈を用ひて繰返して同一の事を述べて居るのであるが、此の所に挙げられる國名は散文の方では五十五、偈の方では五十三であり、その中には共に金性の國が見えて居る。¹⁶ レビ博士は之を以て金姓と同語と考へられたらしく *Suvarṇa-gotra* と決定して居られる。金性の國を守る神は禪那離婆婆天子、摩那婆乾達婆、善稱緊那羅、禪那離沙婆夜叉、寶冠阿修羅、香意鳩槃荼である。此等を大孔雀明王經 *Mahā-māyūrī-vidyārāja* 所載の *Yaksha* 名と對照すると禪那離婆婆は社那里婆婆即ち *Jinasabha* にあたり、靚火羅 *Tukhara* の *Yaksha* である。摩那婆乾達婆は摩納婆大神即ち *Manava* で *Uttara* の神となつて居る。¹⁷ レビ博士によれば此等の神々には多少の異同はあつても皆本來その土地の信仰對象であつたのが集大成せられて經典に現れるやうになつたと考へられるから *Jinasabha* も *Manava* も守護地が *Tukhara* であり *Uttara* である限りは印度北方である。之を以て月藏經の記載を見れば金性國 *Suvarṇa-gotra* は明かに印度北方に位置する事となる。女國乃至は *Suvarṇa-gotra* がヒマラヤの彼方に存在するとする印度人の考へは尙説話的傾向は免れない。しかしそれは全くの荒唐無稽なものではなく、事實があつてはじめて粉飾し發展せしめられたものであ

る。それ故にこそ宇宙論の中に取入れられ生命を持ち續けて行くのである。蓋し全然の虚構はたとひ一時的には存在しても永續性は失はれるからである。

印度に於ける宇宙論の發展は佛教の東漸に伴つて漸次支那の方面にも入つて来る。後漢末期より魏晉南北朝時代にかけて多くの譯法僧が東方へ來り、又此等の地方からも數多の僧侶が求法の爲西域印度へと赴いた。その目的は直接には佛教經典の將來であつたにせよ同時に彼等は旅行家として多くの紀行文を今日に残して居る。支僧載の「外國事」、釋智猛の「遊行外國傳」、竺法維の「佛國記」、釋法盛の「歷國傳」等が少くとも名前だけは残り、洛陽伽藍記の「宋雲紀行」、法顯の「佛國記」、道安の「西域志」等は全部乃至は一部分が傳はつて中世の中亚印度の歴史地理の研究に絶大なる貢獻をなして居る。此等旅行家は多くは支那人の僧侶の故もあるであらう、甚だ正確な記述をなして居り、その足跡は現今の地圖の上に於ても殆ど總てが一致する。しかしやはり他方に於て佛典にあらはれた印度的宇宙論はそのまゝに取入れられ、或る場合に於ては寧ろ印度の地志と同じく支那の地志乃至は宇宙觀とも合致せしめ居る。例へば道安の西域志は水經注卷一、二河水の條に盛に引かれて居るが、支那の崑崙を中心とした宇宙論を印度の須彌山中心の宇宙觀を以て解釋して居り、大唐西域記に於てもその卷一には全くの印度宇宙觀で世界構造を説明して居る。斯の如き事は佛教徒である限り當然な事であらう。が又事實的記事と合揉して存在せしめられた所にその特徴があり、支那に於て總てが眞實と信ぜられ、彼等支那人特有の茫漠たる宇宙觀を事實化する傾向を強めたことは否定出来ない。當時の支那人の一部は此等外來文化によつて齎された新たな具體的事實と新たな抽象的觀念との境界を確定し得ず、彼等の知らんとして知り得ざりし崑崙とか河源とかの問題について新文化の荷擔者の説明をそのまゝに受持認容したのである。⁽²⁰⁾

四

その好例として括地志の外蕃志を取上げて見たい。⁽²¹⁾ 括地志は云ふまでもなく唐の太宗の第四子濮王泰を中心として當時の史官蕭德言、顧胤、蔣亞卿等が編纂したもの、貞觀十五年頃に成つたと云ふから、未だに玄奘以下の求法僧の紀行は全く出て居ない。外蕃志が魏晉南北朝の諸書を參考にして成つたものなる事はこれのみにても疑ひない。その中鐵勒、高麗、靺鞨等は事實的な書き方で些かも荒唐的分子を含んでは居ない。が鹽州、火山國、小人國になると到底現實的記載とは認めがたい。おそらく前志の記事をそのまゝに襲つた爲であらうと思はれる。しかし我々が特に注意を惹かれるのは印度關係の記事で、沙祇大國、天竺國、王舍城、小孤石山等或はそのまゝ、或は幾分形をかへて皆水經注所引の釋氏西域志に出て居る事である。就中阿耨達山に就いては特に記事が豊富である。

阿耨達山亦名健末達山、亦名崑崙山、恒河出其南。(括地志 卷八)

とあり、阿耨達山、建末達山、崑崙山を同時に一山と説明し、中央亞細亞乃至は西藏高原に發源を持つ四大河は共に此の山より出づる事になつて居る。釋氏西域志を見ると、⁽²³⁾

阿耨達大山、其上有大淵水、宮殿樓觀甚大焉、山即崑崙山也。

とあり、既に阿耨達山と崑崙山とを一致せしめて居る。阿耨達は *Anavatapta* の *Pali* 形 *Anatapta* より考へて當時の *Prakrit* と思はれるが此が山名として出て來るのは支那文獻のみであり、印度系の文獻、恐らく當時傳へられて居た阿毘達磨大毘婆娑論^{第三}、大智度論^{第七}、乃至は俱舍論^{第十}等には専ら池名としてあらはれて來る。阿

毘達磨俱舍論^{第十}をその基準として見るに、

大雪山北有香醉山、雪北香南有大池水、名無熱惱、出四大河、一號伽河、二信度河、三徙多河、四縛翳河、無熱惱池、縱廣正等面、各五十踰繕那量、八功德水盈滿其中、非得通人、無由能至。

とあり、Himalaya の北 Gandhamadana の南に Anavatapta 池がある事になつて居る。西域志の大淵水は此の Anavatapta 池であり、阿耨達山は池名よりして與へられたる名稱に過ぎず Gandhamadana に對して支那の宇宙論者が自由に附加した山名に他ならないであらう。括地志が佛教によつて傳へられた印度宇宙論に支那的修飾を加へた南北朝時代の諸書を材料として居る事は右の例でも理解出来るが更に注意すべきは前掲括地志引用文にづく次の句である。

崑崙弱水非乘龍不至、有三足神鳥、爲王母取食也、弱水有二原……俱出女國北、阿耨達山南、流會於國北、山周四十里、外周圍水。

前者は山海經海內北經の、

西王母……其南有三青鳥、爲西王母取食、在崑崙墟北。

から系統を引くものであらうが、「崑崙弱水非乘龍不至」とするのは既に崑崙が天帝の居と考へられ、神遷思想を背景として居る事が想像せられる。後者に於て弱水が阿耨達山の南から出るとされるのは實は阿耨達山が崑崙山と同一であると云ふ前提が立てあり、崑崙はその必然的性質が河源であるからである。問題となるのは此處に女國なる文字の出現する事で、「弱水有二原、俱出女國北阿耨達山、南流會於國北。」は北の阿耨達山と南の女國との中間に弱水の河源がある事を示す。尤も弱水は崑崙とは勿論の事、前漢頃にも既に西王母と離れずに考へられて居たのであるから、此の女國は其の後神遷思想に於て發展せしめられた西王母、玉女等の組織する一仙郷

を表はして居るとも思はれない事はない。窺見の致す所か當時傳來した佛教典籍にも女國の事を記したものが發見出來ないので、此の考へ方は一應是認されるやうに見える。しかし括地志の完成したのは貞觀十五年頃である。既に十年には隋書が出來上つて居る。恐らく括地志の文は、前代から漠然と知られて居た女國が隋代に實在的な姿を現はして來た爲に之を無視する能はず、西王母の位置に置き代へて一方では此の外蕃志全體に示して居る宇宙觀の西方世界の組織を破壊せず、他方では女國の存在をも認めて、兩者の間に調和を計つたものではなからうか。もとより現存の括地志は甚だ斷片的であり、或は佚亡せるものに女國の記載があつたらうと云ふ事も想像出來ないではない。成程佛教經典には *Shi-ni-ya* の明確なる記載はないが *Suvarna-gotra* に就いては既に記事が見出され、印度思想乃至地理觀念に於ける、*Shi-ni-ya* の存在は事實である。前に述べた魏晉南北朝時代の西域關係の地志類に女國の事が記されて居ないとは到底考へられない。括地志の女國も近視眼的な史料解釋によれば隋書との關係でのみ一應納得は行くが、大觀すればやはり、今は佚して居る地志類の記載がその根柢をなして居るものとせねばならぬ。要するに括地志の記載は如何なる系統のものであるにせよ、女國に就いてはその位置を説明するだけであり、地理的記述の要素は多樣複雑のものであることは認めなければならないのである。

五

流石に玄奘は此の點些かの混亂をも見せない。大唐西域記卷一には、

瞻部洲之中地者阿那婆答多池也唐言無熱惱、舊在香山之南、大雪山之北、周八百餘里、金銀瑠璃頗胝飾其岸焉、

金沙彌漫、清波皎鏡、大地菩薩、以願力故、化爲龍王、於中潛宅、出清冷水、給瞻部洲、是以池東面、銀牛

口、流出兢伽河舊曰恒河、又曰恆伽、繞池一市、入東南海、池南面金象口、流出信度河舊曰辛頭河、繞池一市、入西南海、池西

面留璃馬口、流出縛葛河舊曰博又河、繞池一市、入西北海、池北面頗胝師子口、流出徙多河舊曰私陀河、繞池一市、入東北海、或曰潛流地下、出積石山、即徙多河之流、爲中國之河源云。

とあり、印度の宇宙論の正統を傳へ、支那の河源論にまで一應注意を加へて居る。Anavatapta は池名であり、Gandamadana と Himalaya との中間に存在し四大河は總て之より出づるが、彼は此處に女國の事は一言も云つて居ない。玄奘に於ては女國は現實に存在したから何等印度宇宙論の説明は必要なかつた。この意味で、彼の宇宙觀は正統的であり、彼の信仰教養が西域記第一卷に此のやうな序文を書かしては居ても、結局それは彼自身に於て宇宙觀として終るものなることが分る。觀念と事實は彼に於ては誠に明瞭な區別を設けられて居る。女國が印度宇宙論と關係なしに存在するのは極めて當然と云はなければならぬ。我々は此處に再び彼の女國の記載へと戻るであらう。

さて、玄奘が傳へた女國が大雪山中にあり、「東接土蕃國、北接于闐國、西接三波訶、」である事は前にも述べた。土蕃國は吐蕃國であり、當時邏娑 *Thar-sa* を中心とし *tsan-do* の中央流域を占領して居た、純粹西藏民族の王國である。續高僧傳玄奘卷第四傳一の條には、

其〔尼波羅〕境北界即東女國、與吐蕃接壤。

とあるから東方はかなり中央西藏に突入して居たものらしい。西境の三波訶は同じ西域記卷四屈露多國の條に、

從此北路千八九百里、道路危險、踰山越谷、至洛護羅國、此北二千餘里、逕途艱阻、寒風飛雪、至秣羅娑國、

亦謂三波訶國

とある。洛護羅が *Tahul* なる事は現在疑はれては居ない。三波訶の別名秣羅娑は Cunnigham 氏によつて秣

羅婆とよまれ *La-dwags* の土名 *Mar-po* の音譯とられ、⁽²⁶⁾ A. H. Franke 氏は、其の位置に就いては贅したが林羅婆は *War-sa* なりとし、藤田博士、松田學士共に此の兩説を紹介して居られる。⁽²⁷⁾ 自分は今之について若干の疑問を持つて居るのでいづれの音譯とも賛成はしかねる。⁽²⁸⁾ が、當時既に小西藏は勃律國として存在して居るのであるから、⁽²⁹⁾ その位置比定については兩氏の説は認めてよいであらう。續高僧傳^{卷第}四 玄奘傳一の條に、

從闐蘭達羅、過雪山東、即東女國。

とあるのは正に之と一致する。ste より *Lha-sa* に至る貿易路に沿うて東は吐蕃國境、西は *La-dwags* に至る兩側の土地が女國の範圍であつたのであらう。玄奘が「東西長、南北狹」と記して居るのも尤もの事と思はれる。

以上の如く大唐西域記によつて一應女國の範圍は考へられるのであるが、之を隋書と比較すると如何なるであらうか。隋書の女國傳には「在葱嶺之南」と漠然と云つて居るが附國傳にも前掲の如く附國の西に女國をおき、明かに玄奘の所傳と一致する。同傳の「其東北連山綿亘數千里、接於黨項」も黨項とは數千里の連山を東北に距てゝ居るのであり、決して直接にその勢力範圍が接して居るの謂ではない。入吐蕃道の東側にある黨項が吐蕃の西にある女國と接する筈はないのである。しからば同書女國傳の「亦數與天竺黨項戰爭」の一項は極めて不自然になつて來るが、隋書は何故にかゝる矛盾した記載をなしたのであらうか。

その解決は「王姓蘇毗」の解釋によつて定まるであらう。ペリオ教授は慎重にも唐史の記載の如く東女國と蘇毗を一應區別した。⁽³⁰⁾ が之に對して松田學士、諏訪義讓教授は共に蘇毗即女國と明瞭に斷定してしまはれた。⁽³¹⁾ 松田諏訪兩氏の斷定の根據は一に此の隋書の一文にかゝつて居るやうである。蘇毗については新唐書西域傳に、

蘇毗本西羌族、爲吐蕃所并、號孫波、在諸部最大、東與多彌接、西距鶻舞峽、戶三萬、天寶中王沒陵贊欲舉國

内附、爲吐蕃所殺、子悉諾率首領奔隴右、節度使哥舒翰護送闕下、玄宗厚禮之。

とあり、入吐蕃道が *Tha-la* を越える地點より北は *Munus-su* の邊まで擴がつて居たと思はれる。ペリオ教授は蘇毗を *Su-bi* 又は *Su-yi* と想定したが法成の釋迦牟尼如來像法滅盡之記と *Li-yul luh-bstan-pa* との對照研究により之が *Su-bi* なる事羽田博士によつて確定せられた。^{③④} 孫波に就いてはペリオ教授が *Thomas* 氏の研究せる西藏文書に出づる *Guna-pa* を以て同一なりと考へた。^{③⑤} 王名の没陵贊は唐蕃會盟碑を参照すれば先づ *phro* に没盧があてゝある故に没は *phrul-teh* の *ba* の對音であり、陵は *ling* であるから *hdogs-phrul* 及び *rjes-ling* の *rin* と考へられ、没陵即ち *phrin* と推定せられる。贊は云ふまでもなく *b(r)usan* である。結局没陵贊は *phrin-b(r)usan* であらう。悉諾は之亦會盟碑に多く例證あり、*disag* なる事確實である。要するに兩名とも到底女性の名とは考へられない。蘇毗が「本西羌族」と記されて居るのと此の王名の西藏語で完全に解くことの出来るのは、此の種族が純然たる西藏語族である事を示して居る。それに反して女國に就いては新舊唐書共に西羌別種と記し、且その中に現はれて來る言語は一つとして西藏語で解けるものはない。第一此の蘇毗が女國であると記した文句は何處にもない。女國と蘇毗は全く別な存在でなければならぬ。隋書の女國傳の記載は蘇毗に關する知識が誤つて混入したものであらう。隋書は女國傳を除いては西藏高原の内情に就いての記述は一つもない。附國傳はある事はあるが此は傳聞の系統よりして寧ろ西南夷と考へられて居り、實際西南方面を通じて中原と交渉あり、唐代の所謂入吐蕃道は未だ附國に開かれて居ない。従つて附國が中央西藏に位置する事は吐蕃の名で支那に知られるまでは理解せられなかつたのである。かく考へると隋代支那の此の方面に關する知識は甚だ漠然として居た事が分らう。

尤も之については次のやうな反問が起るかもしれない。成程女國と蘇毗は別の國である事は分つた。しかしそれは女國の別名が蘇毗とされて居る場合の解答ではあつても女國の王姓が蘇毗である事の解答にはならないであらうと。此の疑問は充分正しい。しかしそれについては自分は以上の史官の認識不足を背景として「王姓蘇毗」*suo-bji* は「王姓蘇伐」*suo-bi-wat* を誤つたものだと思へたい。女國が大唐西域記に蘇伐刺拳瞿恒羅と記されて居る事は前に述べた。*sotira* は「姓」「氏」であるから固有名詞ではなく、姓は正に *Suvarna* にある。故に正しくは王姓蘇伐刺拳とでも書すべきであらう。支那人はかかる場合には省略して王姓蘇氏と書する事もある。が「蘇伐」で表すのは多少疑はしいとされるかも知れない。しかし新唐書の龜茲國傳を見ると王名に蘇伐勃駄があり、その子に蘇伐疊がある。龜茲で發掘された *Brahmi* 文字の龜茲語——所謂 *Tokharien B*——の通行免狀はその時の大王 *Oroce pi lante* が *Gvarnate* である事を示して居る。レビ博士は之を新唐書の蘇伐疊にあたとし、梵語 *Suvarna-deva* を *Synonym* とした。⁽³⁶⁾ *Lüders* 氏はサンスクリットの斷簡からして *Suvarna-deva* は承認したがシノニムの *Svarnate* は *Svarnatep* なりと主張し、ペリオ教授亦疊が *d'iep* なる所から自己の豫想せる所が適中せるを述ベリユーダース氏の説を全面的に承認した。⁽³⁸⁾ レビ博士は更に同文書から *Svarnabūṣṭe* (*Skt. Svarna. Suvarna-puṣṭpa*) なる王名を指摘し之を蘇伐勃駄にあてたが駄は駛の誤と見做した。⁽³⁹⁾ 此の比定は現在では何人にも疑はれない。唐書に出る蘇伐疊の弟訶黎布失畢も之によつて龜茲語の **Haribūṣṭe* (*Skt. Svarna. Haripuṣṭpa*) であらうことが推定せられる。⁽⁴⁰⁾ それは兎も角アリーヤ語の *Suvarna, Svarna* が支那語では蘇伐なる形に簡約して用ひられる事は之で明かになつた。女國の場合に「王姓蘇伐」とあつたであらうとの考へも決して荒唐のものではない。まして隋書女國傳には女王の夫を金聚と書して居るに於ておやである。「王姓蘇毗」を以て女國と蘇毗

とを同一と見做す論は先づ成立しないものである。

更に此を益々明かにするのは釋迦方誌の次の記載である。

蘇伐刺拏瞿咀羅言金也出上黃金、東西地長、即東女國、非印度攝、又即名大羊同國。

釋迦方誌に大唐西域記が引用されて居ることは一見して分る。其の入天竺路には三道ありと述べ、特に東道即ち西藏通過の道程に詳細であり、正史の記載とは書き方が全く異つて居るのは此の書が別の系統を引いて居る爲であらう。恐らく當時李儀表、王玄策等の西藏通過の遣使の事あり、特に王玄策は「中天竺國行記」なる書を著したとさへ傳へられて居るから、^④釋迦方誌の西藏内部の事情は之を基としたに相違なからう。「東女國、又即名大羊同國」の記載は何等疑ふ必要がない。前掲の諸史料に東境が吐蕃とあり、慧超傳には吐蕃に役屬した事まで云はれて居ながら、一度正史其の他の吐蕃傳を開けば其の西境に何等女國の存在がなく、羊同のみが屢々断片的に現はれる理由も之で明かになつた。羊同の專傳は正史にはなく、通典にのみ短文が掲出されて居る。

大羊同國東接、西接小羊同、北直于闐、東西千餘里、勝兵八九萬人……貞觀十五年遣使來朝。

その位置は女國と完全に一致するではないか。

所で法苑珠林卷六 四には、

從吐蕃國向雪山南界、至屈露多・悉立等國云、從此驛北行、可以九日有一寶山、山中土石並是黃金、有人取者

即獲殃咎出王玄策
西國行傳

とあり、悉立國なるものを傳へて居る。新唐書西域傳の悉立國も之に相違ない。ペリオ教授は新唐書の傳に注意し *Baya-n-gotra* にあたる西藏語 *gSer-rabs* の漢字音譯と認めて居る。^⑤ *siet* は唐代の西藏語には *mgo-can*,

residing の sa に用ひられる用例しか見出し得ないが後世の例としては *Sar-ra* に色拉 *sheli-an* があてられ
たりするから、西藏語の *sa* 音が悉で寫されるのは決して無理ではない。立 *li-tia* に至つては完全に *rahs* に一
致する。ペリオ教授の比定は流石にと思はざるを得ないほどに正確なものである。然らば悉立國は女國であると
云ふ事になるが、羊同國との關係は如何であらうか。法苑珠林の文は王玄策の西國行傳より取られた事が註記し
てある。がこれは中天竺國行記と同一のものであらう。王玄策は西藏を通過して入竺して居るのであるから西藏
語の國名を傳へた所で何等怪しむ必要はない。中天竺國行記の系統を引くと推定した釋迦方誌には羊同國が女國
として出て來て居る。悉立と羊同が同一史料で區別して記されて居るのはこれは一つの矛盾ではないか。更に新
唐書を見ると吐蕃傳には羊同國が盛に出、西域傳には悉立國が出て來る。これも一つの矛盾ではないか。女國と
悉立の人口は殆ど一致する。しかし羊同になるとその倍の人口になつて來る。かうなると釋迦方誌の東女國即大
羊同國の見方までも多少其の根源が疑はしくなつてくる。女國、悉立、羊同の異同に就いての解答は極めて困難
である。しかし自分は次のやうに考へたい。ペリオ教授の説に従つて女國と悉立は同一國と認めるが、尙それは
女國の都城乃至は根據地であらう、羊同は女國に征服され支配されて居た屬領地であつたのであらうと。もとよ
り之を積極的に證明する材料があるわけではない。が少くともかく考へれば相互の史料は何等の矛盾をも來さず
に解釋し得る。若しこの臆測が許されるならば女國の内容、限界は愈々明確の度を加へて來る。女國と蘇毗との
區別についてはもはや全く贅言を要しない。新唐書西域傳に諸部落中最大なりと記された蘇毗は微かながら隋代
にも支那に知られたであらう。天寶十四載に蘇毗王子悉諾邏 *Sit-nor-lo* が來降した時、隴右節度使哥舒翰はその
對策の中で、

蘇毗一蕃最近河北吐澤部落數倍居人。(冊府元龜 卷九七七)

と述べて居り、會昌十一年に尙恐熱 shan-dkon-ba-her が鄯州節度使の尙婢婢を討つた時には、

〔恐熱〕至渭州、與宰相尙與思羅戰薄寒山、思羅敗走松州、合蘇毗吐渾羊同兵八萬、保洮州自守、恐熱謂蘇毗等曰、……爾屬乃助逆背國耶、蘇毗等疑而不戰。(新唐書 吐蕃傳)

であつたと云ふから、蘇毗はその位置からしても支那に近く、隋代に名の傳はる可能性は充分にある。同時に女國は東は附國より西はラダツクに至る長大な國であり、直接の交渉によつて隋朝に知られる所あつた。隋書の編纂者が極奥西藏の此の二大國に對する認識を誤り王姓に於て混同したのも無理からぬ次第と云へる。かやうな事情を考慮に入れると隋書に屢々黨項と戰爭したと云ふのは女國ではなくて蘇毗なのではあるまいかと疑はれる。舊唐書女國傳は隋書を參照して居るに拘はらず王姓のことも黨項との戰爭の事も襲用しては居ない。蓋し當然の事であらう。

六

然らば舊唐書の記載は全面的に信用に價するかどうか。次にこれについて若干の考察を行つて見よう。前に掲げた引用文によつて舊唐書は其の境域について「東與茂州黨項接、東南與雅州接界、隔羅女蠻及白狼夷」とのみ云つて居る事を確め得た。隋書、西域記が共に其の東境を吐蕃に接せしめて居るのに、此の舊唐書の記載は吐蕃の東方支那との接壤地帯にまで境界を押し擴めて居る。之は明かに大きな矛盾であらう。この矛盾の解決には同書女國傳の次の文を注意する必要がある。

貞元九年七月、其王湯立悉與哥隣國王董臥庭、白狗國王羅陀忽、逋租國王弟鄧吉知、南水國王姪薛尙悉囊、弱

水國王董辟和、悉董國王湯息贊、清遠國王蘇唐磨、咄霸國王董藐逢、各率其種落、詣劍南西川內附、其哥隣國等皆散居山川、弱水王卽國初女國之弱水部落、其悉董國在弱水西、故亦謂之弱水西悉董王、舊皆分隸邊郡、祖父例授將軍中郎果毅等官、自中原多故、皆爲吐蕃所役屬、其部落大者不過三二千戶、各置縣令十數人理之、上有絲絮、歲輸於吐蕃、至是悉與之同盟、相率獻款、兼齎天寶中國家所賜官誥共三十九通以進、西川節度使韋皋處其衆於維縉保等州、給以種糧耕、感樂生業……其年西山松州生羌等二萬餘戶相繼內附、其黏信部落主董夢葱、龍諸部落主董辟忽皆授試衛尉卿。

最初に出て来る「其王湯立悉」は冊府元龜、資治通鑑等には「女國王湯立志」とあり、明かに女國王の姓名である。しかし貞元の時代に吐蕃の西にあるべき女國の王が劍南の西州に至つたと云ふ事は甚だ疑はしい。當時の吐蕃は河西を領有し北庭都護府を陥れていはゞ全盛時代であり、之を横斷して東方支那と通ずる事は不可能である。中原多故と云ふのは安史の亂以後の種々の國難を云つて居るのであらうから、女國以下が此の時以來吐蕃の所管になつたと云ふ事も一應理解出来るがさうなると高宗代に吐蕃が羊同を完全に征服した(新唐書吐蕃傳)とか、慧超が北天竺に至つた開元時代既に吐蕃の所管になつて居たとかの記事は之と矛盾するのではないか。先づ此の史料はその點からして疑問を提供するわけであるが、更に精細に讀んで見ると全く其の國の位置が吐蕃の西方にない事が分つて来る。女國に弱水があると云ふのは藤田博士も指摘せられた通り、西王母の傳説から思ひついたものかも知れないが其の部落及び王が西川に至つて居る所を見ると事實土語で弱水と呼ばれたかどうかは知り得ないにしても、部落の存在だけは認めなければならない。弱水王は即ち國初の女國の弱水部落であり、其悉董國は弱水の西にある。そしてとは皆邊郡に分隸して居たと云ふ。此の邊郡は支那の邊郡なる事間違ない。だから祖や父は將

軍、中郎、果毅等の官を例授されたのである。西川節度使の韋臯が其衆を維州に安居せしめ給與をなしたのも尤もである。但この句の最初に「其哥隣國等」とあり、特に女國を除外したやうにも思はれるが、それにして女國の弱水部落とか、悉董國は弱水の西にありとかあるのは女國が此等の國の東方或は此等と近接して存在したことを認めたからに外ならぬ。「其黏信部落主董夢德、龍諸部落主董辟忽」とある文の「其」は西山松州の生羌等を指して居るから此等の部落はやはり劍南西川の邊郡に存在を求むべきであらう。董姓は哥隣王、弱水王、咄霸王に於ても用ひられて居り、同系統の種族なる事を示して居る。⁽⁴⁴⁾ 舊唐書德宗本紀下 貞元九年春正月の條には劍南西川羌女國王楊湯?立志の謁見が出て居り、彼此相發明して此の場合の女國は確實に其の位置を松州附近に定めざるを得ない。冊府元龜卷九七六に、

大曆十一年正月甲申、以降吐蕃論乞髻湯沒藏悉諾律爲歸德將軍。

とあり、又同じく、

十二年七月壬辰、贈故降吐蕃歸德將軍論乞髻湯沒藏悉諾律懷化大將軍、又以論乞髻子湯忠義爲起德將軍。

とある。⁽⁴⁵⁾ 論乞髻湯沒藏悉諾律はおそらく blon khri-bzan thad(?)-(b)tsan stag-bsher であらう。この場合湯が姓なることは唐蕃會盟碑の例よりも知られ、又其の子の湯忠義なる支那風姓名は愈々これを確實にする。湯姓が西藏語族系なることは明かである。女國王の姓は湯であるから舊唐書の傳に於て湯姓の女國の記事は總て此の系統に屬するものとし、一應分別するならば此の傳の後半は全く前半と異つた女國の記事となつてしまふ。前に掲げた史料系統圖に於て自分が史料となしたのはかゝる松州附近の女國に關する記録を意味したのである。舊唐書には隋書や西域記に現はれた東女國の記事と共に四川徼外の地にある女國いはゞ第三女國とでも稱すべきものの

記事が混淆して收められて居たのである。舊唐書の編纂者の認識不足は兩者を合揉して一傳を作つた爲、東女國の東境は今や第三女國の東境と混じ茂州、黨項、雅州、羅女蠻、白狼夷の邊まで擴げられてしまつたのである。私見を以てすれば舊唐書女國傳は「隋大業中、蜀王秀遣使招之」以下は殆ど此の第三女國の記事とすべきであらう。例へば前に引用せる文の諸王名等は後半の文中に屬して居り、尙西藏語乃至は其の類族語の性質を看取出来るにもかゝらず、前半の文にある、

女王號爲賓就、有女官曰高霸。

には全く西藏語的性質を認めるわけには行かない。西藏語には賓 *pin* なる形は存在しない。高 *kau* の如き *Diphthong* に至つては語の本來の性質上存在を許されないものである。

以上は舊唐書女國傳が決して單一對象に對する史料のみを以て構成されたのではない事を述べたのであるが、此の誤謬混同は新唐書に於ても其のまゝ受け繼がれて居る。但新唐書に於ては西域記の記事がかなり引用されて居り、其の四圍に關しては「西屬三波訶、北距于闐」と西域記其の儘を引き、「東與吐蕃黨項茂州接、東南屬雅州羅女蠻白狼夷」と云つて舊唐書と西域記を合成して居る。云ふまでもなく吐蕃と接せしめたのは西域記によつたが爲であり、黨項、茂州、雅州に接せしめたのは舊唐書によつた爲である。かゝる矛盾も結局第三女國の史料混入にその原因を求めなければならぬ。新唐書の記載は最も詳細を加へたかの如くに見えて實は甚だ雜然と前代の諸書を參合したに過ぎないのである。

七

以上甚だ雜難極まる叙述ではあるが、史料批判を中心として隋書の本文に女國の王姓を蘇毗とした事が決して

信用に値しない事、従つて之によつて蘇毗即女國となす事の全く誤つて居る事、羊同は女國の範圍であつた事、舊唐書の女國傳は二つの女國を混淆して記して居る事、故に其の境域には變更が加へられて誤解の基となる事、新唐書は其の上に更に西域記を導いて混亂せる記録を作つた事等を明かにし得たと信ずる。

松田學士は蘇毗と女國とを同一のものとなしたが爲に蘇毗の別名 *Su-mi-pa* を西域記の東女國の西境三波訶 *Sam-ga-la* と一致せしめられたが、⁽⁴⁶⁾此の兩國は吐蕃を中に挟んで東西に全くと云つてよい程離れて居り、到底一致する筈はなし。言語の上から云へば *Su-mi-pa* なる西藏語は *afix* の *pa* を以て其れ自體完成した言葉なのであり、それに重ねて **la, *ka* 等の語が附けば言語としては成立しない。或は西藏語が他國語に訛轉すると云ふ事も一應は考へられるのであるが、西藏周圍の諸民族でかゝる訛轉形式の言語を用ひるものは寡見を以てすれば一つもない。*Su-mi-pa* と三波訶とは全く別個の存在と見做すのを妥當とする。

女國が新舊唐書に西羌の別種と述べられて居ることは前にも注意したが此の點隋書、西域記は共に沈黙して何も語つて居ない。要するに純粹の西藏民族でない事は確かであらう。隋書には次のやうな記事がある。

俗事阿修羅神、又有樹神、歲初以人祭、或用獼猴、祭畢入山祝之、有一鳥如雌雉、來集掌上、破其腹而視之、有粟則年豐、沙石則有災、謂之鳥卜。

阿修羅は云ふまでもなく *Asura* 又は *Asura* である。語原的に遡ればイーランの *Ahura* と同系であり、インドアリアの神である。⁽⁴⁷⁾又樹神のあるのは此の國に於ける樹木崇拜を意味して居る。純粹西藏民族の間には樹木崇拜は行はれて居ない。少くとも當時の吐蕃は「事獼越之神」であり、一部分は「崇敬桑門」である。^(新唐書吐蕃傳)樹木崇拜は鬱蒼たるヒマラヤの原始林乃至は濕潤地帯の人々にのみふさはしい。開元年間に北天竺を訪れた慧超は、

又迦葉彌羅國東北、隔山十五日程、即是大勃律國、楊同國、婆播慈國、此三國竝屬吐蕃所管、衣著言音人風並別……亦有寺有僧、敬信三寶、若是已東吐蕃、總無寺舍、不識佛法、當土是胡、所以信也。

と述べて居る。開元時代に吐蕃に寺舍がないと云ふのは誤であるが楊同國即ち羊同國更に云へば女國の範圍内に佛法が行はれたとするのは信すべきであらう。かゝる精神文化は傳播性を有するし、實際吐蕃にも佛法は行はれて居た程であるから、當時佛教が印度方面より波の如くに押寄せヒマラヤの彼方に及んで居たとしても別に怪しむに足りない。佛教の信仰によつては女國と吐蕃との間には區別はつけ得ない。が樹木崇拜となると兩者の間には信仰の有無が考へられるやうである。而して此の文に三國共に吐蕃に屬しながら「衣著言音人風竝別」とあるのは此等三國が吐蕃とはかなりかけ離れた系統の種族なる事を感じしめる。もと／＼自分は之をアーリア種と論斷する程勇氣はないが少くとも主流的には非西藏語族である事は確實であらう。新舊唐書が西羌之別種となしたのかもゝる所に原因が存するものと思はれる。

故に此の國が女國と呼ばれた因由に就いても藤田博士が「蓋西藏之民族、有一婦多夫之俗、女國之名所由來也」と云はれて居るのは尙早計の嫌なしとせぬ。^{④⑤}冊府元龜^{卷九}六一に、

女國在葱嶺之南……女子貴者則多有侍男、男子不得有侍女、雖賤庶之女、盡爲家長、猶有數夫焉、生子皆從母姓。

とあり、女國が一般に一妻多夫制である事を示しては居るが、尙それは秋葉教授の指摘された如く世襲的な女王支配、女官の優位、女子家長制、母系血統と諸條件が揃つた完全な母權社會なのであり妻が數夫を所有する一妻多夫制なのである。普通傳へられる西藏の一妻多夫制は之とは異り、兄弟による一妻の所有である。しかも此の

場合、一妻に對する權利は兄弟平等などではない。長兄が決定的な特權を握つて居る。一家に於ける父の財産相續權は長兄にある。長兄が死んではじめて其等の特權は次男に移る。いはゞ家長權は男子側にあつて女子側にあるのではない。⁽⁵⁾ 同じ一妻多夫制であつても女國の場合は母家長形式 *Matriarcale Form* であり、西藏の場合は父家長形式 *Patriarcale Form* である。西藏の例は現代の報告によるものであるが更に古代に遡つて吐蕃其の他の西藏系諸族を検べて見よう。吐蕃の内情については非常に複雑な問題があるので別の機會に詳論することにし、今結論的なもののみを述べると、財産相續權は男系の男子を傳ひ兄弟相續で進んで居る。所謂母系制の殘存はやはり認められるが女性の地位は決して男子のそれに優越しては居ない。一妻多夫制の資料も全然ないのであるが、現在の狀態より推して行はれて居たであらうとは想像出来る。蘇毗も西藏族ではあつたが少くとも男系の男子が相續權を握つて居ただけは明かである。之に反して女國では「俗重婦人、輕丈夫」^(舊唐書)とか「女貴者成有侍男」^(上同)とか西藏族と全く逆な現象が行はれて居る。男性の社會で女性の地位が不利となるのと同様、女系の社會では男性の地位が不利となる。一妻多夫にも色々ある。單に一妻多夫制と云ふことのみを以てしては女國の種族を決定するのは不可能であらう。秋葉教授は社會學的立場から現存のカシア族、ネイア族の婚姻形式、ラダツクの *Bagde* 婚等を參照し、唐以後忽然として西藏高原より消えた女國の行方は、南印度の一夫一婦制、一夫多妻制の諸族の中に尙一妻多夫制で孤城を守るネイア族とも考へられぬではないと臆測せられた。⁽⁶⁾ 今日印度各地に分散せる非アーリア族には多夫婚の形態を多く殘したものであり又ヒマラヤの周邊にもかゝる形態の實例は多いと云ふ。⁽⁵⁾ アーリアンに壓迫せられた印度先住民が高山地帯に逃避して昔々らの社會を繼續して行くと云ふ事は一應考へられないでもない。

前に慧超傳の文に、大勃律、楊同、娑播慈の三國は竝に吐蕃に役屬して居るが衣著言音人風は竝に別なりとあるのを引き、此の三國が吐蕃とはかなり異つた種族であらうと推定しておいた。此の引用文の末尾には、「吐蕃總無寺舍、不識佛法、當土是胡、所以信也。」とあり、三國が共に胡であり、其故に佛法を信すると述べられて居る。胡なるが故に佛法を信するとは當時一般に胡が佛法を信じて居た事を前提としての論である。唐代の「胡人」は云ふまでもなく東方イラン人である。慧超傳の場合も此の例に漏れない。例へば、

從大寔國已東、竝是胡國、卽是安國・曹國・史國・石驪國・米國・康國等雖各有王、竝屬大寔所管。(同傳六十 四丁裏)

とあつて *Sogd* の地方が數へられ、

又此六國惣事火祿、不識佛法、唯康國有一寺、有一僧、又不解敬也。(同傳七十 三丁表)

とあり、此の場合は特に佛法が盛と云ふわけではないが、麴賓國は、

此國土人是胡、王及兵馬突厥、衣著言音食飲、與吐火羅國、大同小異、……國人大敬信三寶、足寺足僧。(同傳五十 十丁表)

とあり、謝朧國は、

土人是胡、王及兵馬卽是突厥、……此王及首領、雖是突厥、極敬三寶、足寺足僧、行大乘法。(同傳五十 一丁表)

とあり、犯引國は、

此王是胡、不屬餘國、……王及首領百姓等、大敬三寶、足寺足僧、行大小乘法。(同傳五十 四丁表)

とあつて何れもイラン人の間に佛法がかなり行はれ居た事を示して居る。然らば胡とせられる限り楊同國はイラン系と見做さなければならぬ。たゞイラン人獨特の剪髪の風が傳へられて居ないのはやはり彼等が純粹のイラン種でない爲であらう。廣大な羊同國を領有して居た女國は或はイラン系と西藏系との雜種でもあらうか。王

號の賓就や女官號の高霸等も或はイラン語を以て解けるのではなからうか。自分はイラン學、アーリア學の專攻者ではないから此に關しては沈黙を守りたい。切に其の道の人々の教示を期待するものである。

八

以上によつて自分は今まで同一概念のもとに考へられて居た四國を區別し得たと信ずる。即ち、吐蕃、蘇毗は共に純粹西藏語族で父家長形式、吐蕃は中央西藏に存在し、蘇毗は東部西藏、吐蕃の東北に存在する。女國は非西藏語族で徹底した母權社會、勿論母家長形式で、西部西藏にその位置が比定出来る。第三女國は西藏語族乃至はその類族語族で四川徼外の地に存在しやはり母家長形式らしい。少くとも女王支配 Gynokralie だけは行はれて居た。東女國が女國と呼ばれた理由は結局の所完全な母權社會と云ふことに歸一するであらう。

吐蕃興起前後の極奥西藏は以上の四國が最も勢力を振ひ互に相異れる社會組織を持つて活動を續けつゝあつたのである。

女國の史的意義の一つは松田學士^(註)の指摘せられた如く、其の特產物金、鹽を南は印度、北は吐谷渾へと輸出したことにある。此の貿易に於ける莫大な利益を以て女國社會は成立して居た。されば東に隣れる勃興期の吐蕃は之に注目しない筈はない。貞觀八年に吐蕃が吐谷渾を攻撃した時には既に羊同の兵が率ゐられて居り、高宗代に至つては羊同は完全に吐蕃に征服せられて居る。(新唐書 吐蕃傳) 玄奘が Brahmapura に行つた時には「東接吐蕃」であつた女國も慧超が北天竺に至つた時には既に「爲吐蕃役屬」であつた。吐谷渾と女國といづれが先に征服せられたかは今直には明かになしがたい。しかしそれはいづれが先であつてもよい。女國、吐谷渾間の貿易路は羊同を通過して居る、吐蕃が女國の支配して居た羊同を攻撃した場合、貿易路に沿つて吐谷渾に目を注ぐのも自然の成

行である。東西交通の要路を占め、その貿易に莫大な利益を収めつゝあつた吐谷渾は吐蕃の目にも大きく映つて來たに相違ない。⁽⁵⁶⁾又吐谷渾にしてもその背後の祕密的寶庫なる女國の危機が自己にとつて何を意味するかは百も承知の事であらう。吐蕃と吐谷渾との死力を盡しての抗争はかくして荒漠たる極奥西藏の高原に繰り擴げられるのである。吐蕃の勃興の原因は種々に考へる事が出来るであらう。しかし少くとも女國への征服が其の重要な契機をなしたとする事是否定出来ないのではなからうか。

補註

- ① Schlegel は梁書の扶桑國の東千餘里にある女國の人々を以て千島に近い蝦夷地の海獸の一種と見做した。(Problèmes géographiques II. Niu kouo, le Payes des Femmes, T'oung Pao, 1895 Vol. III.)
 - ② Kiaproth, Notice sur les amazones de l'Asie centrale (Magazin Asiatique, 1825)
- クラブローテのみでなく歐人學者は一般に女國を Land of Amazon 等と呼ぶ傾向が強い、しかし實在の女國には女子の軍隊は原則的には存在しない。Amazon と呼ぶのは印度側の史料からの一方的な呼稱と云ふべきであらう。
- Wilson のカシミール史、Bachofen の Mutterrecht の存在は秋葉教授の研究によつて知つたが共に遺憾ながら參照出來なかつた。故にカシミール史については専ら A. Stein のそれを使用する。⑦參照。
- ③ W. Rockhill, The Land of Lamas. 1891. Supplementary notes, p. 339—341.

丁謙「新舊唐書西域傳地理攷證」(浙江圖書館叢書所收)二丁裏の東女國の條に註して次の如く云つて居る。

東女即陪書女國、其都城今日被勒摩、地圖作坡里布特、在印度德列部北境、大雪山間、時屬地東至茂州雅州、北至于闐、是今西藏所轄各番族皆其種類。

彼は明かに新舊唐書を其のまゝに信じて居るのである。

藤田豐八博士「慧超往五天竺國傳箋證」(第二北京版)二十四丁裏。

中田薫博士「馬端臨の四裔考に見えたる比較法制史料」(法學協會雜誌第三七卷十二號)

佐喜眞興英氏「女人政治考」も遺憾ながら未だ寓目の機會を得ない。

秋葉隆教授「女國の多夫婚姻について」(社會學雜誌第五十一號)秋葉教授の研究は主として社會學的立場からであり示唆に富んだものである。

松田壽男學士「女國に就いての考」(池内博士還曆記念東洋史論叢)

④ P. Pelliot, *Autour d'une traduction sanskrite du Tao Tê King* (T'oung Pao Vol. 13, 1912) p. 358.

丁謙前掲書三十五丁表。

松田壽男學士「吐谷渾遣使考」(史學雜誌第四八卷) 一三九二頁。

⑥ 松田學士「女國に就つての考」八一八頁。

⑦ A. Stein, *Khalhana's Rajatarangini, A Chronicle of the King of Kāśmir*, Vol I. p. 137.

⑧ 松田學士前掲書七九頁。

⑨ 藤田博士前掲書二二二頁裏。

⑩ T. Walters, *On Yuan Chwang's Travels in India*, Vol. I. p. 330.

⑪ 松田學士前掲書八〇一頁。

⑫ *Mahabharata* chap. I. p. 184—99.

⑬ A. Stein, *Ibid*, Vol. I. p. 137—139.

⑭ S. Lévi, *Le catalogue géographique des Yakṣa dans la Mahāmyūri* (Journal Asiatique. II serie Tome 5, 1915) p. 111.

⑮ A. Stein, *Ibid*.

⑯ S. Lévi, *Notes chinoises sur l'Inde*. V. Quelques documents sur le bouddhisme indien dans l'Asie centrale (B. E. F. E. O. Tome 5, 1905. p. 262. p. 266.

⑰ S. Lévi, *Le catalogue géographique des Yakṣa*. (J. A. II. serie, Tome 5, 1915. p. 120.

⑱ *Ibid*. p. 119.

⑲ 向達「漢唐間西域南海諸國古地理書叙錄」(北平圖書館館集第四卷六號) 二十三頁。

王庸「中國地理學史」(中國文化史叢書第二輯所收) 一六七頁。

⑳ Henri Maspero 教授は既にかゝる印度西域方面の地理的知識が先秦時代に支那に影響しつつあつた事を主張する。
(「マペロ」先秦時代の支那に於ける西方文明の影響) 史學雜誌第四十篇)

㉑ 括地志は俗南閣叢書本を用ひた。槐廬叢書本には外蕃に就いて若干の補遺があり、慧琳的大寶積經音義、寶星陀羅尼經音義、金光明最勝王經音義、佛頂尊勝陀羅尼經序音義等より若干の佚文が蒐めてあるが當面の問題には關係のないものである。尙自分は五百五十卷もあつた括地志が何が故に四五年の短日月で整理編纂を完成し得たのか疑問に堪へなかつたのであるが、これは東方文化研究所森研究員によつて、隋代に六朝の地志が一應編纂され、それが基になつて出来た事を知つた。記して感謝の意を表する。(昭和十六年十一月八日東方文化研究所創立記念講演、唐代地理學概観、森鹿三氏)

㉒ 新唐書藝文志に、

括地志五百五十卷、又序略五卷、魏王泰命著作郎蕭德言、祕書郎顧胤、記室參軍蔣亞卿、功曹參軍謝偃、蘇易撰。

とあり、

玉海卷十 唐括地志坤元錄の條には、

魏王泰善屬文、卽府置文學館、得自引學士、貞觀十二年奏撰括地志、引著作郎蕭德言、祕書郎顧嗣、記室蔣亞卿、功曹謝偃、蘇勉撰次、衛尉供帳、光祿給食、分道計州、緡緝疏錄、凡五百五十篇、歷四平成、詔藏祕閣、賜物萬段。

とある。資治通鑑唐紀^{卷十}によると貞觀十六年春正月乙丑に上つた事になつて居る。人名官名に於て一致しない點があるが今は新唐書の方に従つておく。

²³ 水經注^{卷一}引用。

史記大宛傳の傳末には禹本紀を引いて、河出崑崙、崑崙其高二千五百餘里、日月所相避隱爲光明也、其上有醴泉瑤池。

とあるから、かなり古くから崑崙が河源であり、大池を戴いて居たと考へられたらしい。之は印度の宇宙觀と甚だ一致せしめられやすい傾向を持つて居る。

²⁴ 古代支那に於いては崑崙は漠然と西方の山と考へられて居たらしい。支那は西北方に高山峻險が連つて居る爲自然此の方面に天柱があり、天と地とが連絡されて居るものと思はれた。傳説的な聖人仙人は此によつて天に到り、又到り得るとせられたのである。津田左右吉博士「神選思想に關する二三の考察」〔滿鮮地理歴史研究報告第十〕参照。

²⁵ 崑崙が本來漠然と西方を指したものである事は前註に述べた如くであるが、何時の間にか山名となり、支那に於ては地勢上より大河は皆西北方に發源する爲、崑崙が河源なりとの考は自然起つて来る。しかも其の河源が實際には甚だ明

瞭でない所から崑崙の茫漠性とは極めて結びつきやすい。史記大宛傳の、

天子〔漢武帝〕案古圖書、名河所出山、曰崑崙。は其の漠然たる崑崙の位置を河源と云ふ現實的基點によつて確定せんとしたものである。

²⁶ A. Cunningham, The Ancient Geography of India. I. The Buddhist Period. 1871. p. 143.

²⁷ A. H. Franke の説は彼の書を種々検討したが終に發見出來ず、やむなく藤田博士が慧超傳に引かれて居るのによつた。Warsa は低地義と註されて居るから正しくは Marsa と綴るべきである。

²⁸ カンガム氏は秣羅娑の娑は娑の誤と見做し之を mar-po と考へたのであるが正しくは dmar-po と綴るべきである。しかし po を婆 b'wa で寫すやうな粗雑な事は少くとも西域記では他に行はれて居ない。假に po を pa, ba と置を換へて考へて見た所で、それは單に「赤」であり、氏の云ふやうな「赤土」の意味は出て來ない。氏は更に dmar-po yul の略であるとも説明して居るが、この西藏語の形は自分の狭い管見では用ひられて居ない。Ia-dwags 地方は現在でもたゞ mar-yul と呼ばれるのであるがそれは赤土の意味ではないやうである。A. Jäschke, Chandra Das は共に mar-yul を低地の義に解つて居る。(兩氏の T. E. D. 参照) フランケ氏の mar-sa も實は此から思ひついたものであらうが、mar-sa なる語が實際に此の地方で行はれて居るかどうかは尙疑問の中に存する。言語比定について兩氏

の説に従ひ得ないのは右の如き理由からである。

秣羅娑の別名三波訶については未だ定説がない。音は *sam-pa-ha* であり、カニンガム氏は之を *gTsah-po* の對音と主張したと云ふが取るに足りない妄説である。(A. H. Franke, *A History of Western Tibet*, 1907, p. 4.) 松田學士は蘇毗の別名 *Sumpa* の訛轉と見られたのであるが、²⁹⁾ 蘇毗の説が成立するかどうかは本文に於て後述する。

²⁹⁾ 勃律は西域記の註釋家等により一般に *Bolor* 乃至は *Baltistan* と考へられて來たが、諏訪教授の研究により *Bru-ga* なる事が確定せられた(諏訪義讓教授「于闐國應記漢譯攷」支那佛教史學第一卷第四號八十七頁註五) 自分はかねてから *Bolor*, *Baltu* なる語が勃律なる音に一致しないのを訝うて居たのであるが此處にはじめて疑問が氷解した。勃 *b* 音は西藏語の *phrut-ri-en* の *ba* を示し、律 *luet* は *hdogs-phrul* の *ru* に一致する。蓋し西藏語の *u* は寧ろ *u* であるからである。新唐書卷二二西域傳には「大勃律或曰布露」とあるがこの布露も明かに *Bru-ga* の *Bru* を寫したものであらう。 *Bru-ga* は *Bru-sha* 又は *Bru-tsha* とも綴るから、或は勃律の場合は *Bru-tsha* の音寫であり、布露の場合には *Bru-ga* 又は *Bru-sha* の音譯かも知れない。と云ふのは前者の場合であると *tsa* に支配されて *Bru* は *Brut* に近くなり、後者の場合には *Bru* に近くなるからである。尤も自分は「勃律」が *Bru-tsha* 等に一致するからと云つて勃律即 *Bru-tsha* と公式的に直接的音寫なりとは考へたくない。寧ろ當時の政治的狀態よりして西藏語の *Bru-ga* 等

proto-type にあたる勃律地方の土語があり、それが漢字に音譯されたをしたい。此が最も常識的な考であると思ふ。

Bru-ga は單に西藏にとつて軍事的な役目を果したばかりでなく文化的發展にも大に寄與して居るのであるが、それに就いては又別の機會に詳論する積である。

³⁰⁾ P. Pelliot, *Autour d'une traduction sanskrite du Tao T'o King* (T'oung Paq, 1912) p. 358.

³¹⁾ 松田學士前掲書八一〇頁。

諏訪教授前掲書。

³²⁾ 冊府元龜卷九には蘇毗の内附を天寶十四載正月の事として記して居る。蘇毗王子の名は悉諾邏であり、その父の名は沒凌替である。沒凌替の替は贊の譌であらう。 *phrin* の *ba* は現在ラッサ方音では發音されないが此の時代には明かに存在して居た。例へば尙論聖達突瞿 *shan-blon ched-po* *dga* の中に喻寒寬寧達がある。(新唐書) *B. Laufer* は *yul-gan phrin-po* と還元するが自分は *gyo-khan phrin-po* と見る。つづれにせよ寬寧達を *phrin* とするには變りはない。寬は *miek* であるが *o-sa-h* **biék* の音も持つて居たであらう。尙此の事は複雑な論證を必要とするので近き將來に充分検討する豫定である。悉諾邏は新唐書の悉諾で同じく冊府元龜卷九には、

天寶十四載四月、以投降蘇毗王子悉諾邏爲左驍衛員外大將軍、封懷義王、賜姓李名忠信、其屬官賜各有差。

とあり同書卷九には、天寶十四載四月癸巳として右と同文が掲げられて居る。新唐書吐蕃傳にはやはり同年の條に蘇

(「唐字脱」?)

吐子悉諾邏として同様の事が見えて居る。吐蕃傳の文は突然現れるのであるから以上の諸史料と對校しなければ理解出来るものではない。悉諾邏は Stag-sgra であるが新唐書自身二様に記して居るので邏の字の存在有無は決定が困難である。しかし常識的に考へれば存在するのが適當なやうである。

- ③⑧ P. Pelliot. Note sur les T'oung-pao et les Sou-pi (T'oung Pao. 1921) p. 330.

- ③④ 羽田亨博士「ホルペリオ教授共編「燉煌遺書」第一集釋迦牟尼如来像法滅盡之記解説。

- ③⑤ P. Pelliot. Ibid. p. 331.

- ③⑥ S. Lévi, Documents de l'Asie centrale—Le „tokharien B" langue de Koutcha. (Journal Asiatique. 1913.) p. 317.

- ③⑦ H. Lüders, Zur Geschichte und Geographie Ostturkians (Sitzungsberichten der preussischen Akademie der Wissenschaften, phil.-hist. Klasse. 1922.) S. 252.

- Lüders, Weitere Beiträge zur Geschichte und Geographie von Ostturkestan (Sitzungsberichte der preussischen Akademie der Wissenschaften phil.-hist. Klasse. 1930) S. 20—23

- ③⑧ P. Pelliot. Note sur les anciens noms de Kucha, d'Aqsu et d'Üç-Turfan. (T'oung Pao Tome 22. 1923.) p. 127.

- ③⑨ S. Lévi, Ibid. p. 321.

- ④⑩ 訶黎布失畢を梵語で解く試みはない。しかし畢は

piet であるから梵語の pa とは一致しない。やはり Swamhaspe の例よりして龜茲語 buspe の pe にあたるとせねばなるまい。但し訶黎に當る龜茲語を求めるのは困難で、梵語より推定するより外ないであらう。

- ④⑪ 法苑珠林卷一傳記篇に、

中天竺三行記十卷、右此一部皇朝朝散大夫王玄策撰。とあり、歷代名畫記卷三には、

中天竺國圖原註云、有行記十卷圖三卷、明慶三年(六五八)王玄策撰。

とあり、舊唐書經籍志には、

中天竺國行記十卷王玄策撰。

新唐書藝文志にも、

王玄策中天竺國行記十卷。

とある。王玄策に此の著あり、圖まで附してあつた事は疑ひない。しかし歷代名畫記以外の諸書は皆圖の事を記してないのであるから此は唐代既に散佚してしまつたのであらう。行記の方も宋代には既に傳はらなくなつて居る。(馮承鈞氏「王玄策事輯」清華學報第八卷)

- ④⑫ P. Pelliot. Autour d'une traduction sanskrite du Tao To King. (T. P. 1912.) p. 358.

- ④⑬ 藤田博士「慧超傳」二十四丁裏。

- ④⑭ 冊府元龜卷九には松外蠻の一姓に董氏ある事を傳へ、同書卷九には、

〔天寶十三載〕吐蕃白蘭二品官籠董占庭等來降。

とある。二品官籠は他の諸例と比較して二品籠官かも知れ

ない。いづれにせよ自分は *blon* の音譯と見るから姓ではない。此の場合姓は董である。

又新唐書卷二二 南蠻傳白水蠻の條を見ると唐が左領軍將軍趙高祖を郎州道行軍大總管として此の討伐を行はしめた時、鬼主董朴なるものが逆戦して居る。鬼主は同條に、

夷人尙鬼、謂主祭者爲鬼主。

とあり、此の事件は册府元龜卷九では高宗永徽二年の事に扱はれて居る。

同書卷九開元十五年の條には白州の大首領董芳櫓の來朝を傳へ、同書卷九永徽二年の條には特浪生羌董悉泰求等が茂州に至つて歸附した事を記して居る。資治通鑑卷九十九では此の事は同年冬十一月戊寅の事となつて居る。又同書の永徽五年春正月壬戌の條に、

羌西夷就内附、以其地置劍州。凍就特浪生羌卜樓大首領也。劍州瀾縹陽松州都督府。

と凍姓を傳へて居るが特浪生羌と云ふからには董姓と同一であらう。以上の諸族は皆東部西藏乃至は四川徼外の地に存在して居り、明かに西南夷は羌種である。董姓が西藏系なる事此によつて益々確實である。

- ④5 論乞髡のことは舊唐書吐蕃傳、唐會要卷九にも出る、唐會要では論乞冉に作つて居る。

- ④6 松田學士は「ペリオ氏の如く蘇毗と孫波即ち *Sumpa* とを全然同一視する事は許されるであらうか」(前掲書八一四頁)と疑つて居られるが新唐書では明かに孫波は吐蕃によつて蘇毗に附された種名になつて居る。ペリオ教授の考へを待つまでもなく蘇毗が孫波なる事は正しいのである。ペ

リオ教授は尙孫 *Sun* と *Sunm* との不一致に氣付き羌族たる蘇毗の西藏語と中央西藏の吐蕃の方言とは多少異つて居たのかも知れないから孫波と *Sumpa* が根本的に同一であるとは斷言し得ないと言はれて居る。(P. Pelliot. Note sur les Tou-yu-houen et les Sou-pi. T. d. 1921) p. 330.

現在 Ando 方面には *Sumpa* なる縣名があり、又寺名にも此の名が残つて居る。(S. Chandra Das. T. E. D. 參照)土地の一致よりして恐らく唐代の *Sumpa* と同一であらう。例の *Sumpa nkan-po* も *スミス氏* は *Sumpa* なる形で傳へて居るが *アムド方言* は *Sun-bha* なる事 *higs-med nam-nkhaq* の *Hor-chos-byun* の記す如くである。(橋本光賢氏編「西藏文蒙古喇嘛教史」九八頁、外務省調査部譯「蒙古喇嘛教史」二二二頁) *ジグメナムカ* は長く蒙古に居たのであるし、*Sun-bha* なる形を記すのは蒙古音の影響であらうとも考へられぬではない。しかし五體清文鑑を見ると西藏語 *pa* は皆滿洲文字 *ba* で寫されて居る。清文鑑の編纂には蒙古喇嘛僧從つて蒙古發音が入りこむ可能性があると言へばそれまでであるが、それでは *ジグメナムカ* の場合には何故 *ba* で寫さずに *bha* で寫したか、結局 *Sun-bha* なる形は *アムド方言* と見做さざるを得ないのでないか。 *bha* がラッサ方言 *pa* に對する *アムド方言* の正確な音寫であるとするれば、それに先行する語の語尾が *コ* でなくて *エ* であると言ふのは極めて自然である。 *スンバケンボ* はその呼名の如く大佛教學者である。西藏字で *bha* なる形を用ひるのは何等躊躇せしなした事

であらう。しかし bha なる形は本来西藏語にはない。唐代の東部西藏人は *atic* の pa をわざ／＼梵語の知識を借りて bha と寫す程文化的な餘裕はない。依然として pa は pa として存在せしめたのである。但 *u* は西藏語では完全存在し西藏文字を以て表すことが出来る。Sum-pa なる形が存在せしめられたのは右のやうな事情によるものであらう。當時のラツサ方言で *Sun-pa なる發音があり、東部西藏では Sum-pa (實は Sum-bha) と發音され、現在では逆に中央西藏でも Sum-pa なる形がもとは己れより出でたのも知らずに受容れられて居るのであらう。Hor-chos-byun は以上のやうな點から見てもなか／＼興味ある貴重な文献である。

④7 A. Macdonell, *Vedic Mythology*, 1897, p. 156.

④8 當時ラツサ方面には *hPhrul-snan* や *bSam-yas* 等の大寺院が既に存在して居た。詳細は別稿に譲りたい。

④9 藤田博士「慧超傳」二十四丁裏。

⑤0 秋葉教授前掲書一〇頁。

⑤1 ミュラー・リヤー氏原著、木下史郎氏譯「婚姻の諸形式」(岩波文庫版)五六頁。

リヤー氏は Moorcraft 及び Captain Turner の報告書か

ら此の記錄を取つて居る。せめて Turner だけは見たいと思つたが不可能であつた。邦人では輝かしき入藏者青木文教、河口慧海の兩師が共にその旅行記に西藏の一妻多夫制に就いて貴重な報告を出されて居る。(青木師「祕密之國西藏遊記」三四一頁、河口師「西藏旅行記」改訂版一一六頁)

⑤2 秋葉教授前掲書一二頁—一九頁。

⑤3 リヤー氏前掲書六〇頁、六七頁。

Westernark, *The History of Human Marriage* Vol. III, pp. 193.

⑤4 松田學士前掲書、七五九頁、八一九頁。

⑤5 吐谷渾の國際貿易上に於ける位置に就いては松田學士「吐谷渾遣使考」(史學雜誌第四十八篇)に充分解き盡されて居る。此の研究は劃期的な文獻と云つてよいであらう。

〔附記〕本論文の慧超傳は藤田博士の所論を引用する都合上第二北京版を用ひたがすべて羽田博士の「慧超往五天竺國傳彙錄」(京都帝國大學文學部史學科編紀元二千六百年記念史學論文集)及び「燉煌遺書」所收の寫眞版を對照して誤字を補正した。